【実践報告】

表現することへの興味を育てるための試み

― ディベート、新聞作りを通して ―

城谷公美

1　国語科における「表現」の位置づけ

国語科教育の目的は本来、「読む」「書く」「聞く」「話す」ことのできる生徒を育てることである。この観点からこれまでの本校の国語教育を振り返ってみると、以下の問題点があげられる。

「読む力」「聞く力」つまり理解力の養成にはある程度の達成をみてきたが、「書く力」「話す力」つまり表現力の養成は充分とはいえなかった。特に中高六年一貫教育を考えるとき、中学部においてこれが極めて重要であるにもかかわらず、重視されず見過ごされてきた。高校部においても大学入試を意識しすぎるあまり、重視するまでには至らなかった。

中学部において古典（特に文法）偏重が重要な問題点としてあげられる。中学一年で口語文法、二年で文語文法理解が重視されるあまり、本来の古文の面白さとは違った暗記中心の授業に陥り、結果、生徒は古文嫌いになりがちであった。文法は確かに内容理解の手助けにはなるが、文法のための文法であってはいけない。

中学部においてあげられるもう一つの重要な問題としては、古典偏重に陥ったがゆえに、本来の国語（小説、詩、俳句、短歌、戯曲等）が軽視され、教科書の作品を表面的に教えるだけの授業になってしまったことである。

国語科としては以上の反省の上に立ち、表現力の養成を目指し、本来の古典教育、国語教育を目指し、新カリキュラム作りに取り組んだ。

まず、国語表現の授業を六ヶ年通して行うこと。ただし、読解力との関連を考慮し、原則として独立した授業は行わず現国の授業の中に組み込むこと。知識の詰め込みに傾きがちであった中学部の文

法の授業は独立させないこと。古典は中学三年からとし、中学一年、二年の時期は、思考力、表現力を養成することを最優先する。

こういった中で生まれてきたのが「表現」という授業である。

2　生徒観（三六回生）

明るく活発な学年で、クラブ活動にも積極的に参加している。集中して物事に取り組めるのだが、飽きやすく長続きしないところがある。受験を突破してきただけあって、知識は豊富である。が、丸暗記で終わってしまっていて、それを活用するとなるとできない生徒がほとんどである。男子ということもあってか、自然分野に興味を示すものは多い。

（一年時）積極的に取り組もうとする生徒が多く、発表も活発であった。書くことに関しては、長い文章を書くとなると、苦手に思う生徒が多かったように思う。また、書いた文章を見直そうとする意識がうすく、当初は誤字脱字、文のねじれなどが文章中に多く見られた。また、難しい言葉はよく知っているが、意味まできちんと理解し、使いこなすとなるとできないという生徒が見られる。

（二年時）積極的に取り組もうとする姿勢は一年時と変わりないが、発表する生徒は限定されてきた。相手の意見を聞いて自分の考えを深めようとする姿勢が薄れてきた。反抗期か何かにつけて屁理屈をこねる者も出てきた。また、この時期になって、教えられることは意欲的に覚えようとするが、自ら考え、発見するとなると、途端に消極的になる生徒が見られるようになってきた。

以下一年時と二年時のそれぞれの取り組みについて述べていきたい。

3　一年時の取り組み

学習指導案

①　単元名　「新聞を作ろう」

②　単元設定の理由

作文と聞くと苦手に思い、最初から筆が進まない生徒が多くみられたので、少しでもその苦手意識を取り除いてやろうという考えからこの単元を設定した。

新聞記事という形を取れば、一人の書く量が少なく、文種も自分でえらぶことができるので、作文が苦手な生徒にも負担なく取り組むことができると考えた。また、飽きやすい生徒には、「話し合う」「書く」といった活動に変化があるので、飽きることなく取り組ませることができる。そして、書いたまま見直そうとしない生徒に推敲の大切さを意識させるには、皆の目に触れ、直接感想がきける「新聞」がちょうどいいのではないかと思う。

テーマを「環境問題」に設定したのは、自然分野に興味を持っている生徒が多い、現代問題になっていることなので資料が多いといった理由からである。また、事前に「一万羽のコハクチョウ」を学習し、そこで、「白鳥の告白」と題して、白鳥の立場から人間世界を見つめた作文を書かせていたので、生徒にとっては取り組みやすいテーマであったのではないかと思う。

③ 単元の目標

・ 様々な文章を書くことに積極的に取り組む。
・ ニュース記事、意見、感想等の文章の特徴と書き方の要領を理解し、自分の表現に役立てる。
・ 図書館を利用し、仲間と協力して、調査、報告をする。
・ 書いた文章を見直し、よりよい表現を追求する。

④ 指導上の留意点

・ 文章の書き方を選ばせる前に、それぞれの文章の特徴と書き方を確認しておく。
・ 新聞作りの手順を明確にしておく。
・ 話し合いを効果的に行わせる。
・ 推敲を丁寧に行わせる。

⑤ 評価の計画

・ 下書きの段階での生徒の力をとらえておく。
・ 個々が異なる文種の異なる記事を書いているので、それぞれの文種に達成目標を設け、どこまでできたかによって評価していく。
・ 生徒に自己評価、相互評価を行わせる。

⑥ 単元の展開計画（七時間）

時	学習活動	指導
1	新聞作りの目的を確認する	・自分達でテーマを設け、調査、学習していくことを確認させる。
	実際の新聞記事を参考にしそれぞれの文種の特徴をとらえる。	・実際の新聞を提示し、どんな種類の記事が載っているか班ごとに調べさせる。 ・班ごとに発表させた後、プリントを配布し、それぞれの文種の特徴を説明する。
	新聞作りの手順を聞く。	・プリントを配布し、手順を

		明確に説明する。 ・紙面の割り付け、見出しについても簡単に説明しておく
1	テーマとなる環境問題について考える。 現在どんなことが問題になっているか、班で話し合い発表する。 班で、自分達が取り組むテーマを決める。 テーマにそって、自分の分	・事前に学習した「暴れ川を治める」「一万羽のコハクチョウ」「木を植えた人」から人間と自然のあり方にいて考えさせる。 ・環境問題といわれている中で具体的にどういったものがあるかを話し合わせる。 ・発表させた内容を六項目にしぼり、その中から自分達が取り組みたいものを、班で選ばせる。 ・記事は自分が書きやすいも

	担する記事を決める。	のを選ばせる。
1	図書館を利用し、資料を集める。	・できるだけ身近な情報から収集させる。 ・仲間と協力して調査させる
1	文章の特徴を理解する。 記事の下書きをする。 集めた資料を効果的に使う	・ニュース記事、意見文、感想文の特徴を説明し、練習させる。 ・書きやすい文種を選ばせる ・資料の丸写しにならないよう、注意を促す。 ・下書きの段階から自分の文章を見直すことを意識させる ・書き上げたものは、提出させる。
1	推敲する。	・誤字脱字、文のねじれなど表記上、文法上の間違いを訂

	1		
新聞の割り付け、見出しの置き方等について理解する。	記事の清書をする。	評価する。 ・自己評価をする。	
正させる。 ・割り付け、見出し等について説明したプリントを配布する。 ・記事の配置を工夫させる。 ・見出しの重要性について気付かせる。	・生徒同士で下書きの点検を行わせる。 ・濃く、丁寧に、見やすく書くように指導する。	・チェックシートを用意し、 a　積極的に取り組めたか。 b　文章の特徴を理解し、自分の表現に役立てられたか。 c　どういう点を工夫したか等、自己評価をさせる。 ・他の班の新聞を読み合いした後、よかった点、もう少し工夫すべき点を発表させる。	・相互評価をする。

⑦ 学習の成果

・題材の文種の段階から自分で選んで書けたので、作文が苦手な生徒もそれほど抵抗なく取り組めていたようだ。

・よりわかりやすく表現しようとする姿勢がみられた。

・仲間と協力しあい、楽しみながら学習することができた。

・丁寧に推敲する時間をとっても、まだ誤字脱字等がある生徒がいた。が、新聞を読むときに、仲間から指摘されたことで、推敲の大切さを実感したようだ。

・様々な分野に関心を持つことができた。

4　二年時の取り組み

① 単元名　「ディベート」

② 単元設定の理由

二年生になって自分の考えを強く主張しようとする意識がでてき

た。そういった中で、自分の意見は言うけれども、他人の意見を聞く姿勢がなってない者、また、発言しようとするのだけれどうまくまとめられず発言途中でつまってしまう者がまだまだいるのが現実である。そこで、相手の意見を聞く態度を養い、論理的に物事を考える力を身につけるためにこの単元を設定した。

ディベートは、ルールがあり、それによって勝敗が決まる、一種のゲームである。だが、ただ楽しいだけで終わるゲームではない。

ディベートでは、相手の主張にからめて議論を展開していく。だから、相手の主張が本当なのかどうかを吟味しなければならない。相手が何を言っているのか理解できなければ、反論することもできない。勿論、相手に自分達の主張を正確に伝えなければならない。その場しのぎの屁理屈や嘘のデータでは、相手を負かすことはできないのである。

よって、ディベートなら経験の中から楽しみながら「論理的に物事を考える力」「相手の意見を聞く態度」を身につけさせることができるのではないかと考えた。

③ 単元の目標

・ 発表する態度、聞く態度を身につける。
・ 筋道を立てて考える力、話す力を身につける。
・ メモをとりながら話の要点をとらえる力を身につける。
・ 問題を様々な角度からとらえ、ものの見方や考え方を深める。
・ 情報を収集し、活用する力を養う。

④ 指導上の留意点

・ ディベートをやる意義やその方法をしっかり説明しておく。
・ 討論は音声で行うので、声の大きさ、話す速さ、緩急、強弱にも注意させる。
・ メモはポイントを絞って議論の流れが分かるように書かせる。
・ カードを使い、あらかじめ議論の筋道を班で組み立てておかせる。
・ あらかじめ論題をしっかり吟味しておく。

⑤ 評価の計画

・ ディベートの本戦の前に、立論、尋問、反駁カードを見て、その班の議論の道筋を調べておく。
・ カードの内容を評価する。
・ 事前に調べておいたカードを参考にしながら、議論の様子を評価していく。
・ メモから、聞く態度、話の要点をとらえる力を評価する。

⑥ 単元の展開計画（十二時間）

時	学習活動	指導

1	ディベートについて知る。	・ディベートの実践例をビデオで見せて、ディベートの全体像をつかませる。 ・なぜディベートを学ぶのか明確にしておく。
1	三角ロジックについて学ぶ ・主張＝言いたいこと。 ・データ＝主張の根拠となる具体的な事実。 ・論拠＝そのデータが、どうしてその主張の根拠になるのかという理由。	・論理的に組み立てられた意見が述べられるように、基礎を学ばせる。 ・プリントで練習させる。
2	ディベートの形式や用語について学ぶ。 ・立論とは ・尋問とは ・反駁とは　等	・ディベートの試合形式とルールをプリントを配布し、説明しておく。

	班わけをする。 （六、七人）	・多くなり過ぎるとまとまりにくくなるので注意する。
1	班の中でディベートの練習をする。	・ディベーター（肯定側・否定側）を二回、ジャッジを一回経験させるため、簡単なディベートを三回行わせる。 ・論題は資料がなくても取り組めるものを選んでおく。 ・マニュアルとなるプリントを用意しておくと生徒の混乱が少ない。
1	本番で戦う論題を決める。 ・制服を廃止すべし ・校則を廃止すべし 等	・事前に教科書で「形」を学習しているので「形と実質の関係」について考えられるような論題を話し合わせる。 ・論題はどちらの立場（肯定側・否定側）でも議論できる

		ものを考えさせる。 ・決まった論題をどちらの立場で戦うかは、機械的に決める。
2	立論、尋問、反駁を考える	・立論は、三角ロジックの練習で学んだことをいかすように促す。 ・尋問、反駁については、あらゆる場合を想定させ、それをカードでまとめさせる。 ・議論の道筋を組み立てておかせる。
	図書室を利用し、必要な資料を集める。	・相手側が集めそうな資料も尋問、反駁の参考資料となることを示唆しておく。
	本戦 ディベーターを一回、ジャッジを二回経験する。	・ディベーターには、話す早さ、声の大きさにも注意することを促す。 ・メモはポイントを絞って議論の流れが分かるように書かせる。
3	意見文を書く。	・それぞれの立場にたって意見文を書かせる。

⑦ 学習の成果

・自分達で評価するため、議論されている内容を注意深く聞き取ろうとする姿勢がみられた。

・相手に自分の考えを正確に伝えようとする姿勢がみられた。

・メモをとる力は、回を重ねるごとによくなっていった。

・根拠を示して述べるために必要なデータを、集めた情報の中から選択し、活用することができた。

5 反省

・どちらも班活動を取り入れたのだが、普段、消極的な生徒が他のメンバーに触発され、活発に活動することができたという点においては、班活動は効果的であったと思う。しかし、中に

は人に頼りきって自ら行動しようとしなかった生徒がいたことも確かである。そういう生徒たちの学習意欲を喚起するような工夫が必要であった。

・　新聞記事の下書きの際、多くの資料をまとめあげ、自分の言葉で表現する生徒もいたが、資料の丸写しに終わってしまっている生徒もいた。個々の能力に応じて、それぞれの力を伸ばしていけるような個別指導が必要である。

・　今回、ディベートの肯定側、否定側を決めるのは機械的に行った。それは、問題を客観的な立場からとらえ、分析し、それに対して意見を述べるという態度を身につけさせたかったからである。しかし、生徒の中には「自分の意見にあった立場でやってみたかった」という者もあった。より意欲的に取り組ませるには、最初は自分達の考えに近い方でやらせてみる方がよかったのではないか。

6　今後の課題

・　生徒たちにとって興味が持てるものであり、かつ、彼らの能力を高めていけるような教材を研究していきたい。

・　生徒たちの能力の高まりをどのように見とり、評価するのがよいか、今後更に研究したい。

・　やりっぱなしで終わるのではなく、一年生から二年生へとつながっていくような系統性のある指導を考えなければならない。更に、六年一貫教育という長期的な展望にたった指導の必要性がある。

（三木学園　白陵高等・中学校教諭）